

## 陶上の華やぎ—五彩と色絵—展によせて

## 華麗な彩色を求めて

## —大和文華館所蔵「五彩花鳥文大鉢」(清時代)をめぐって

元時代後期に景德鎮窯で完成された磁器は、中国陶磁の歴史に大きな変革をもたらしましたが、また同時に、日本や西洋を含む諸地域の製陶に対しても大きな影響を与えました。磁器の特徴の一つには白く透き通るような素地があり、装飾文様の色合いを美しく際立たせます。磁器に文様を顔料で描く技法には、大別すると、コバルトを顔料とする青花や酸化銅を呈色剤とする釉裏紅など、釉葉の下に文様を描く釉下彩と、釉葉の上に色絵具で文様を描く釉上彩があります。五彩は後者にあたり、黒や赤、黄、青、紫、緑、薄緑、茶など多くの色が用いられて、華やかな文様があらわされました。中国における釉上彩の初期段階としては、金時代の磁州窯で陶器に上絵付けが施されており、日本では「宋赤絵」と呼ばれます。

明時代の万暦年間には赤を多用した鮮やかな色彩で龍や鳳凰、花鳥文などがあらわされた五彩が数多く焼造され、日本で「万暦赤絵」と呼ばれました。力強い文様描写が多い中で、「五彩花鳥文小壺」(展覧会案内の左下図参照 明時代「大明万暦年製」銘 景德鎮窯 大和文華館)は釉下彩の青花と釉上彩が併用されて、小さな壺ながらも、溢れんばかりの彩りがバランス良く配置されています。胴部にあらわされた花鳥文は、寿石と葉の一部、鳥の輪郭線などが青花の青色の線で描かれ、釉葉をかけて焼成した後

に、花や葉・鳥の羽根や足が朱や黄・緑・黒などを色絵具で着色され、低めの温度で焼き付けられています。

上絵付けで青や鮮やかな赤の発色が行われるようになり、清時代に入ると、釉下彩を行わずに釉上彩だけで文様を細密にあらわす五彩の技法が発達し、さらに煌びやかな金彩も盛んに行われています。また素三彩(磁器の素地に色釉で文様を施す技法)や粉彩(磁器に珪瑯の技法をもとに着彩する技法で、「珪瑯彩」ともいう)など、より鮮やかに華やかな着色技法が展開されました。

大和文華館が所蔵する「五彩花鳥文大鉢」(図1 清時代・18世紀)は、大ぶりな鉢の内外面に幾つもの花鳥図が五彩で描き込まれた、ひときわ華やかな作品で、器形にも花が象られています。大きく開いた口縁部は稜花形を呈し、胴部は上下二段に膨らみのある花卉が象られ、釉上彩によって花卉の輪郭線に沿って二重線が引かれ、文様が区画されています。花卉は下段に十弁、上段に捻花状の花

弁十弁が設けられ、花卉内部の小さな画面には、それぞれ花卉と鳥や獅子・蝶・虫を組み合わせた花卉図や鳥獸図が描かれています。見込みには、赤と紫色に着色された牡丹とともに二羽の鳥が向かい合う姿であらわされ、上部の一羽は羽根を広げて飛び上がりながら、振り返って大きく口を開けています(図2)。口縁部内側には捻花形の枠内に、幾何学文とともに花枝があらわされ、また余白部分を小さな点で埋めた中に蝶を配置する文様が描かれています(図3)。

同様の蝶文様は、梅澤記念館所蔵「五彩花鳥文瓶」(清・康熙年間[1662-1722])の胴部に認められます(図4 胴部分)。この作品では縦長の胴部に窓枠を設けて花鳥図があらわされ、窓枠の周囲には蝶や花が点在し、地文様として細かな点描を充填し、淡い緑色の色釉が施されています。また、窓枠内にはキジ科のキンケイ(錦鶏)が二羽、岩の上で向かい合っている様子が描かれ、キンケイは羽根こそ閉じていますが、その姿は「五彩花鳥文大鉢」見込み(図2)に描かれた振り返る鳥と尾羽根の斑文に至るまでよく似ており、やはりキンケイを念頭に、同じような図像の花鳥図が好んで描かれたことがわかります。

なお、大和文華館所蔵の「五彩花鳥文大鉢」は底裏に「Formerly the property of H.I.M. the late Empress Eugénie」(H.I.M〔Her Imperial Majesty皇后陛下に対する敬称〕故ウージェニー皇后旧

所有)と記された貼紙があり、ナポレオン三世の皇后ウージェニー・ド・モンティジョ(Eugénie de Montijo, 1826-1920年)によって所有されていたようです。皇后ウージェニーはパリ郊外のフォンテーヌブロー宮殿内に「中国博物館」や「漆工室」を設け、中国や日本などアジアの美術品を数多く蒐集していたことが知られます。

中国の五彩や日本の「伊万里」・「柿右衛門」(肥前磁器)はオランダ東インド会社によってヨーロッパに運ばれて広く人気を集め、当地では、これらの写しが作られ、磁器の技術の開発を促しました。オランダのデルフト窯では、陶器に錫釉を施して絵付けをし、中国や日本の磁器写しを焼造しています。「色絵康熙写花鳥文八角瓶」(図5 デルフト窯 オランダ・18世紀 大和文華館)は清・康熙年間の五彩をモデルにしており、胴部上方に描き込まれた羽ばたきながら振り返る鳥の姿は、「五彩花鳥文大鉢」の見込みの鳥と同じ姿をしています。躍動的な鳥の姿や明瞭な色使いは、白地に色鮮やかな文様で飾られる華麗な五彩に魅せられ、追い求めた情熱を伝えています。

※図4は『中国の陶磁』第11巻 平凡社 1996年より複写させていただきました。(瀧朝子)



図1



図2



図3



図4



図5

季刊 美のたより No.222

令和5年3月31日

発行 大和文華館